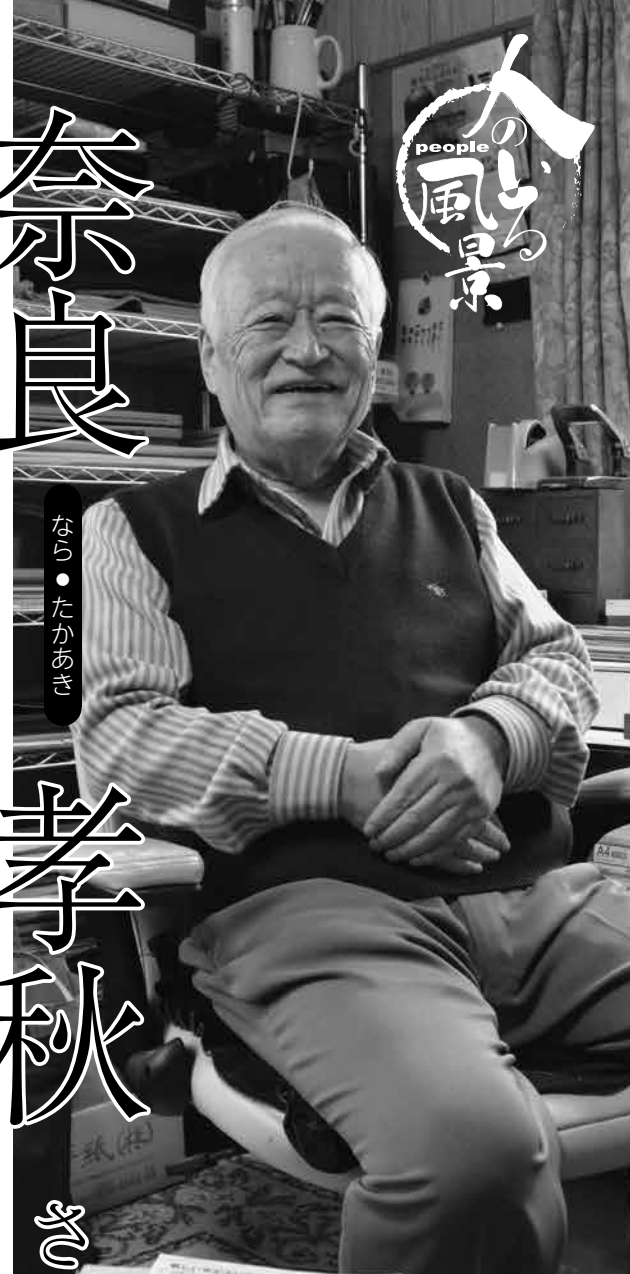


奈良

なら・たかあき

孝秋

さん



◀奈良さんは40年以上、樽前山などの支笏湖周辺の山々を描き続けています。特に樽前山のなめらかな山肌と風不死岳の猛々しい姿は、「寄り添う夫婦のようで格好良い」とのことです。

プロフィール

■奈良 孝秋(ならたかあき)さん/85歳/東雲町在住/上砂川町出身/職歴・千歳中教員(美術)、富丘中開校事務初代教頭、千歳小校長(最終教職)/公民館絵手紙教室・絵手紙の会「やませみ」・千歳市若返り学園絵手紙サークルの講師/平成30年度 市民文化賞受賞

公民館教室の《絵手紙教室》などで講師を務める奈良 孝秋さん(85歳)はこの時期に、年賀状一枚一枚すべてに筆を入れます。その枚数は毎年300枚を優に超えます。

11月2日に、教職時代からの美術活動と絵手紙活動の先駆者としての功績がたたえられ、市長から《市民文化賞》の表彰状を授与された奈良さんにお話を聞きました。

●《絵心》を覚えたのはいつごろからですか

「今のような娯楽がない小学生時代ですね。よく空想の絵を描いていて、クラスの友だちから《漫画の大将》と呼ばれていました。戦時中でしたので、先生から名指しで戦争を鼓舞するようなポスターを描かされたことを覚えています。

何もないとこから絵を描いた

り物を作ったりすることが好きで、《絵描き》では食べていけないので、《建築家》になりたいと《理系》を目指しましたが、国立の学芸大学(教育大学)に進学。縁があり、千歳中で教師生活が始まり、転々としながらも最後は千歳小(校長)でした。結局は、《美術の先生》になっけしませんでしたよ。(笑)」

●絵手紙を始めたきっかけは

「教職を退いてから、教育委員会の生涯学習推進主任アドバイザーを5年務めました。市民から《絵手紙を習いたい》との意見が寄せられました。年賀状では、40年前から《樽前山》を描いていましたので、絵手紙の創始者《小池邦夫さん》の著書を読んで独学し、16

絵手紙講師として伝えたい手作りの美しさ

「上手に描けなくてもいいです、心が通じる喜びが大切なのです。」



年前から公民館教室などの絵手紙の講師をしております。」

●絵手紙の醍醐味とは

「世の中がどんどん便利になって、パソコンで簡単に大量の年賀状を数日で作れます。私が絵手紙を描き上げる時間は11月からの1月半。絵柄は同じでも色合いの表情は全部異なります。手間も時間もかかりますが手描きの絵をもらったときの気持ちは嬉しいものだと思っております。

先日、昔の友人の息子さんから、喪中の挨拶状が送られてきました。そこに添え書きが一言。《亡くなった父(友人)は毎年、先生から送られた絵手紙の年賀状を飾って、眺めていました。》絵手紙はですね、言葉では伝えることができない《気持ち》を相手と通わせるものなのです。

普段、講座の受講者は《何枚描いてもうまく描けない》と言います。上手く描けなくてもいいです、心が通じる喜びが大切なのです。何千枚と描いている私でも、未だに満足いくものは描けていません。良い物を生み出そうと突き詰めていくのもまた、絵手紙の醍醐味です。満足したら終わり。人生と同じです。」



奈良さんの書齋には、描き上げたばかりで乾く前の年賀状がずらりと並びます。明るい朝焼けにしようか、元気の良い深い赤にしようか。出の色合い一つとっても、正に十人(の年賀状は)十色。一枚1筆に思いを込める。奈良さんの真摯で優しさあふれる年賀状を送られる皆さんが、うらやましく思えてきます。